

気弱な教師が、勉強を教えたヤクザと、  
ヤンキー生徒に立ち向かう

ヘッド・バッド・ティーチャー

作・ほら

登場人物表

キミオ（30） 気弱な高校教師。

ガク（35） 出世を目指すヤクザ。

アキラ（18） キミオのクラスのヤンキー

アキラ一派 アキラの一派。3人くらい。

ノブ（18） キミオのクラスのいじめら

れっこ

年配の先生（60代）

○南高校・教室

キミオ（30）が授業をしている。  
教室の誰も聞いていない。

金髪のアキラ（18）の一派が、ノブ（18）の背中にゴミを投げている。

キミオ 「授業終わりま…」

キミオはアキラ一派のところへ。

キミオ「いじめはやめなさい（声震えている）」

アキラ「遊んでるだけですよ？」

キミオ「どう見たって」

アキラ「遊んでるだけだっつってんだろ！」

アキラ、キミオの出席簿とチョーク箱を蹴り落とす。キミオ、びびる。

キミオ「とにかく、授業は聞きなさい」

アキラ「はい」

日直生徒の起立礼のかけ声で授業が終わる。アキラたちはいじめを再開。

○高校・玄関・夕方

ノブに声をかけるキミオ。

キミオ「おい、大丈夫か」

ノブ「大丈夫です」

ノブの顔、青タンができている。

キミオ「大丈夫じゃないだろ」

ノブ「だったらどうなんですか」

キミオ「せ、先生に相談しなさい」

ノブ「相談したら解決するんですか」

キミオ「先生ががんばるから」

ノブ「キミオ先生、口ぼっかりじゃん」

ノブ、吐き捨てて帰っていく。

何も言えず立ちすくむキミオ。

○道路・帰り道

暗い顔で軽自動車を運転するキミオ。

キミオ「口ぼっかりか…」

ドンッ。

キミオの車が前の車に追突。

キミオ「痛：なんて日だよ：」

追突された黒塗りフルスマークの高級車から、どうみてもそっち方面の男、ガク（35）が降りてくる。

キミオ「最悪だ：」

ガク「車寄せろ」

○路肩

車から降りて話しているキミオとガク。

キミオ「すいませんでした：」

ガク「すいませんで済んだらヤクザはいらねんだよ」

キミオ「やっぱりヤクザなんですネ：」

ガク「修理代と示談金で100」

キミオ「100？なんとかならないですか：」

ガク「ならねえな。あんたが払えないならあんたの会社に払ってもらおうか？」

キミオ「それは勘弁してください！会社じゃないし：」

ガク「は？学生か？」

キミオ「違います！：教師なんです」

ガク「教師？どこのだ？」

キミオ「南高：」

ガク「ははーん。先生。どうしようか？」

キミオ「どうしましょう：」

ガク「おれに勉強でも教えてくれんのか？」

キミオ「それならいくらでも：」

ガク「いくらでも？」

キミオ「いくらでも：」

ガク「じゃあ明日から頼むぜ先生」

キミオ「は？」

ガク「おれの家庭教師になれ。半年後、

おれがド底辺でもどっかの大学に受かったら、車のことは15万で許してやる」

キミオ「まじで言ってます？」

ガク「まじだよ！こっちはいつでもマジな

んだよ！100万か、家庭教師やって15

万か、さっさと選べ！」

キミオ「か、家庭教師します：」

○ 翌日・南高校・キミオのクラス。朝

キミオじゃない年配の先生が話している。

年配の先生「キミオ先生は都合により半年間休職されることになりました」

アキラ一派、態度悪く笑ってる。

アキラ「休職だって！だっせー」

アキラ一派、相変わらずノブを蹴ったりしている。年配の先生は我関せず。

ノブ「やっぱり口だけだ：」

○ ガクの事務所・午前中

キミオとガクがデスクに座っている。

デスクには大量の参考書。

キミオ「そういえば、なんでヤクザさんが勉強なんですか：」

ガク「最近では極道も学歴社会でなあ。大学で経営を学んで一発逆転狙いだ」

キミオ「ヤクザも大変ですね：」

ガク「いいか。授業でおれがわからなかったら殴る。おれがテストで間違えたら間違えただけ殴る。わかったな」

キミオ「なんで僕がそんなに殴られるんですか：」

ガク「わかったな！」

キミオ「はい：」

ガク「じゃあ、授業を始めろ」

○ 何度もガクに殴られながら教えるキミオ

○ 同・夕方

ガク、ノートを閉じる。

ガク「先生。けっこうわかりやすかったぞ」  
キミオ「そりゃちゃんと準備しましたから：」  
ガク「なんだよ。普段はちゃんと準備してないのかよ？」

言い返せないキミオ。

○ 数日後・定食屋・昼

キミオとガクが定食を食べている。

ガク「お前なかなかいい先生だと思うぞ」

キミオ「そんなことないですよ。僕なんて：

生徒にもなめられるし。追突した日だっ

て、クラスのヤンキーにすぐまれて：

ガク「びびって引いちまったのか」

キミオ「どうせ僕の言う事なんて誰も聞かないです」

ガク「そりやお前がそんな根性なしな限り誰も言う事なんか聞かぬえよ」

キミオ「僕だって一生懸命やってるんです」

ガク「男は結果出してナンボだろうが。お

れが全部大学落ちてもお前言うんか？僕は

一生懸命やりましたって。んなこと言った

らどうなるかわかってんだろうな」

キミオ「じゃあ、どうしろっというんですか」

ガク「どうしろこうしろじゃねえよ。自分で

考えろ。頭使えよ。教師なんだからよ」

キミオ「そんなこと言われても：」

ガク「まあ、ひとつ言えるのは：男は自分

より強い相手にしか従わぬえ」

キミオ「ケンカでもしろって言うんですか」

ガク「その通り」

キミオ「そんなことできるわけないでしょう」

ガク「おいおい、相手は高校生のガキだろ？

楽勝だろうが。いいか、ケンカだって最後

は頭使えばいいんだよ」

キミオ「どう使えばいいんですか」

ガク、キミオに頭突きする。

キミオ「いてー！」

ガク「こう使うんだ。がはははは」

キミオ「冗談はやめてください」

ガク「マジだよ。額の骨は一番カタいんだ。

理科で習わなかったか？先生よ」

キミオ「習いませんよ。いたたた：」

○ ガクの事務所・モンタージユ  
ガクに勉強を教えるキミオのモンタージユ。2人はどどん厚着になっていく。テストしたり、居眠りしたり。キミオはガクのパンチをかわせるようになってきている。

○ 大学受験会場・外・冬

キミオとガクが掲示板を見ている。

キミオ「ありましたよ！ありました！」

ガク「当たり前だ！おれに不可能はねえ」

キミオ「おめでとうございます！ほんとによかった：ガクさん、がんばりましたね：」

ガク「はははは。先生もな」

キミオ「よかった：ほんとに：あ」

キミオが見つけたのは、アキラ一派。

黒髪になってる。受かったみたいだ。

キミオ、目をそらし反対を向く。

ガク「何隠れてんだよ」

キミオ「いえ、隠れてなんて：」

ガク「ははーんあんなガキにびびったのか」

キミオ「もつといかつかつたんですよ」

ガク、キミオに封筒を渡す。

ガク「知るか。まあいいや。これ。授業料だ。15万。半年間世話になったな」

キミオ「こちらこそ、ありがとうございます」

ガク「じゃあ耳揃えて、車の15万。もらおうか」

ガク、キミオから封筒をぶんどる。

キミオ「ああ：そうでしたね：」

ガク「飲みに行くぞ。合格祝いにおごつてやる」

ガク、キミオを引っ張って行く。

○ 一ヶ月後・南高校・卒業式後の教室

キミオのクラス。キミオが教壇に立つ。

キミオ「最後まで面倒見れなくてごめん。これからの人生は：」

みんな筒を持って騒いで誰も聞いていない。アキラ一派は蔑むような目でキミオを見る。ノブも無感情だ。  
うつむくキミオ。

### ○ 職員室

落ち込んで戻ってくるキミオ。  
外が騒がしい。そこへ、臨時担任をしていた年配の先生が。焦っている。  
年配の先生「キミオ先生、来てください！」  
先生、キミオの腕を引っ張っていく。  
キミオ、出席簿とチョーク箱を持ったまま、引っ張られて行く。

### ○ 校門

人だかりができている。  
キミオが分けて入ると、そこにはなんと、黒塗りの車で乗り付けたガクがアキラ一派にからんでいる。アキラ半泣き。

年配の先生「つ、連れてきました…」

ガク「あんたがこいつらの担任の先生か！」

キミオ「ガ、ガクさん…」

ガク「こいつらの担任かって聞いてんだよ！」

キミオ「は、はい…そうですが」

ガク「後輩たちにお祝いの言葉でもかけてやろうと来てみたらよ、こいつら大先輩にガンつけてきやがったんだけどどういう教育してんのかなおたくのクラスは！」

キミオ「うちの卒業生だったんですか…」

キミオ、まわりを見回すと、先生生徒総びびり。ノブもいる。

ガク「どういう教育してるんですか先生！」

キミオ、ガクに近づいて囁く。

キミオ「どうしたんですかガクさんやめてくださいよ」

ガク、キミオの胸ぐらをつかみ囁く。



ガク「なめられたままでいいのかよ先生」

ガク、キミオを突き飛ばす。出席簿と  
チョーク箱とともにキミオ吹っ飛ばす。

ガクはアキラを軽く、見た目は派手に  
蹴っ飛ばす。アキラ泣いている。

アキラ「すいません！すいません！こいつ  
が！こいつのせいなんです！」

アキラ、ノブを指す。ノブ、焦る。

ガク「知るかくそガキ！」

ガク、またアキラを蹴る。

キミオ、ノブと目が合う。

キミオ立ち上がり、深呼吸。鋭い目で  
キミオ「おれの生徒になにさらしとんじや  
コラア！」

キミオ、ガクにつかみかかる。

ガク、応戦。ステゴロが始まる。

キミオ、慣れたもので、ガクのパンチ  
をすいすいかわしていく。

ガク「おらあ先生！根性見せてみる！」

キミオ「うあああああ！」

キミオ、強烈な頭突きをガクにお見舞  
いする。

ゴントツ！激しい音をたて額がぶつかり  
あう。ガク、倒れ掛かりキミオにつか  
まり：ささやく。

ガク「おれにもこんな先生がいたらな」

ガク、その場に倒れる（ふり）。あたり  
は静まり返る。

アキラ、立ち上がって涙をぬぐう。

アキラ「せ、先生、すげーじゃんかよ」

キミオ、アキラの胸ぐらをつかんで突  
然頭突きを食らわす。アキラ吹っ飛ばす。

キミオ、他のアキラ一派にも激しい頭  
突きを食らわして、

キミオ「お前ら：ノブに謝れ」

絶句するアキラ一派。

キミオ「あやまることがあるだろうが！」

アキラ一派、しぶしぶノブに土下座。

アキラ一派「すいませんでした！」

ノブ、びっくり。そんなノブの肩を叩

くキミオ。

キミオ「卒業おめでとう」

キミオ、出席簿とチョコレート箱を拾って校舎に向って歩き出す。

ガクも立ち上がって、車に歩いて行く。清々しい笑顔である。

ネクタイをゆるめ、堂々と歩いて行くキミオもまた、額から血を流しながらも、その顔は少し笑っている。

○ タイトル「ヘッド・バッド・ティーチャー」  
○ エンドロール

○ 後日・大学の教室

へらへら笑って着席するアキラ一派。

その横へオッサンが座る。よくみると、ガクである。

ガク「へへへ。よろしくな」  
戦慄するアキラたち。